■研究十二月往来〈148〉

禅竹の位置

八嶌正治

能の作家像の中で、戦後の研究史上大きな変容を示しているのが禅竹である。横道萬里雄・表章両氏による岩波日本古典文学大系『謡曲集上・下』は、作品を通しての作家像を考える上で決定的な役割を担っている。『謡曲集上』の方は、世阿弥関係の能を収め、「観阿弥関係の能」八曲、「世阿弥の能」二十一曲、「元雅の能」四曲が作者考定を通して代表曲とされている。『下』の方は、「禅竹関係の能」四曲、「宮増関係の能」四曲、「信光の能」七曲、「長俊の能」四曲、「禅鳳の能」四曲が選ばれ、観阿弥、世阿弥、信光に比して禅竹の能の量は極めて少ない。作者考定の難かしい作家である事は確かだが、四曲という数と、各曲扉付の「備考」が、ムード本意で比較的唯美的な作家像を作り上げたのではないかと考えられる。「芭蕉」では「いかにも禅竹好み」「無常観に重点を置き」「大いに凝っている」、「定家」では、「クセなどで語られる恋い心が、語り手自身の心根とも、相手の男の心根とも、どちらにも受け取れ、そうかといって積極的に二人の心を合わせて描いているのでもないといった点は、例のヴェールをかぶせる手法であろうか」、「玉葛」では「一般に禅竹関係の作品は、世阿弥の能のように主題が強く通っていない。ヴェールを通して物を見るような描き方がその特色である」、「雨月」では、「(主題・人物の)あいまいさが禅竹的だとも言えようか」と評されている。それ以外に、アイの説明を前提に詞章が書かれているといった重要な指摘もあるが、これ等の能の批評を通して形造られる禅竹の作家像は、曖昧にして唯美なる事を形象の特徴とするかのように考えられがちである。こうみると、この書は禅竹のマイナス面を指摘しているようであるが、禅竹とほぼ確定出来る作品からそのような性格を指摘した点の方が、この書の功績として重視されるべきであろうと思う。

昭和四十四年に表章・伊藤正義両氏による『金春古伝書集成』が、昭和四十五年に伊藤正義氏の『金春禅竹の研究』が出版され、作家像としての禅竹は改変する。

前者の解説を掲げさせて戴く。

禅竹関係の作者付として著名なものに、『能本作者注文』『自家伝抄』『享保六年金春八左衛門書上』があるが、現行曲についてのみ言えば、三書が一致して禅竹作とする加茂・鍾馗(但しクセは古曲)・芭蕉・楊貴妃の四曲、及び二書が一致するうちの雨月・小塩・小督・千寿・竜田・玉葛・定家の七曲、計十一曲は、禅竹作と認めてよい曲のようである。舞歌の二曲を重視した世阿弥の系列に属する曲が大半であるが、曖昧模糊とした主題でありながら特異な情趣—華やかさを蔽い尽す哀愁感、哀愁の中の華やかさとでも言いたいもので、彼が言い出した「閑曲」の曲趣に近いのではなかろうか—を現出していることや、粘り強い文体などに独自性が認められる。

後者では作者付にない「野宮」が内部徴証から入り十二曲になっている。『金春古伝書集成』自体の重要さは語り尽くせるものではないが、いたずらに仏教哲理的であるとか、観念的・形而上的であるとかされた禅竹芸論観が

解き放たれ、一休との交渉も極めて晩年である事が明らかにされたのである。

しかし、近時に至り、脇能・切能も含めて更に作品世界が拡大された。能楽論や能楽史にかかわる面だけから見ると世阿弥の存在は大きいが、思想史・精神史とかかわる中世の時代性という観点を導入する時、禅竹の姿は極めて大きなものとなる。禅竹の作品の性格が拡大されて行く傾向を、私は宜に適った事と喜んでいるのである。

謡曲に於ける仏教要素を総合的に考察したものとしては、戦前のものであるが、姉崎正治氏の「謡曲に於ける仏教的要素」(『能楽全書』第一巻所収)が最良のものであろう。精緻さという意味では今一度練り直す必要があるが、独創的視点から能の仏教的要素を分類している。氏の論を私流に恣意的に整理すれば、第Ⅰとして法華経思想と阿弥陀信仰の類、第Ⅱとして真言密教・山伏修験道・両部神道と草木国土悉皆成仏思想の類の、2類に大きく分かれようかと思う。第Ⅰ類中の法華経思想の方はその内部を更に五種に分け、1経文読誦の功徳、2霊鷲山に対する憧れ、3諸法実相という教理、4女人成仏・悪逆成菩提という信念、5諸菩薩に対する随喜渇仰、の諸要素を指摘している。以上の仏教的要素は、箇別に一曲の中に現われる訳ではなく、雑多な形で取り込まれているのであって、法華経思想の3「諸法実相という教理」等は、当時隆盛を極めている天台本覚思想の一環として第Ⅱ類の方に属させてもよい性格である。姉崎氏はこうした分類を施しつつも、大きくその仏教的要素を概括して、主題と共に摘出される具体的な様相としては、「殺生・邪淫の科」「修羅道の苦患」の救いを画く能と、「草木国土悉皆成仏」を画く能の、二種を代表としている。室町時代の、諸思想雑居の中なので截然と分ける事は当然の事ながら出来ないが、前者の主題は、第Ⅰ類の思想に比重があり、後者の主題は、第Ⅱ類の思想を背景として造形されたのではないかと考えられる。ドラマ的な造形を持つのは世阿弥の作品である。演者は、懺悔する者となり、懺悔しなければならない過去の場面を、救われんが為に演ずるのである。その為に造形はリアリズムによる悲惨さの度を加え、演者も、芝居として別人格になり切って演ずるような要素を多分に持っている。しかし、能の大多数を占める草木国土悉皆成仏の世界は、シテ自身の救われた世界を現前させるものであり、罪人としての演劇的行為とは別な、当初からシテの宗教的境地を表出する、能独自の表現世界である。そしてこうした能のあり方と、禅竹の能楽論は、ある程度対応した内容を示しており、それにもまして、天台本覚思想と触れ合う部分が多いのである。その一つとされる伝源信の『真如観』では、本覚真如を常に忘れず、真如の理が生じているという一念が己れを弥陀と化し、此国土にありながら極楽にありとするのである。

○一切ノ非情、草木・山河・大海・虚空、皆是真如ノ外ノ物ニアラズ。

○地獄モ真如也。餓鬼モ真如也。畜生モ真如也。

○草木・瓦礫・山河・大地・大海・虚空、皆是真如ナレバ、仏ニアラザル物ナシ。虚空ニ向テハ、虚空則仏也。大地ニ向テハ、大地則仏也。

この思想は、同書に見るように、法華経賛、両部神道、即身成仏にも跨っているのである。

六輪一露を中心とする芸論の展開に於いて世阿弥に近い性格も見当るが、根っからの宗教人であって、世阿弥能楽論に見るような、理論全体を根こそぎ転回させ、止揚につぐ止揚を行うといった様相をみせていない。禅竹自身、思弁的・究理的性格を持つ上、仏教・儒教・神道・歌道・禅と、あらゆる既成の権威による少々強引な権威づけが禅竹の理論に無理な粉飾を施しているのであり、一旦洗ってみる必要があると共に、諸理論との調整を調

査する事も必要で、中世思想界の混沌たる思想の有り様を反映するものだったのである。

禅竹の能の鑑定には作者付に載る曲名を参考にしながらの、内部徴証を主体とする。三宅晶子氏の精緻な作品分析による「熊野」の禅竹能取り入れは、「千手」「小督」等と同様『平家物語』の僅かな記事を増幅させた素材処理と、現在物歌舞能という様式の開拓として位置づけられる。拡大された今一つのグループは、「杜若」「東北」である。その理由は伊藤正義氏『謡曲集』当該項に精しいが、「芭蕉」の発想と一連のものである。「芭蕉」の中で無常を謡い上げているものの、そこには頽廃はない。無常を謡う冷々とした静寂な趣の中で、キリの「天つ少女の羽衣なれや」の祝言性が夾雑物のように感じられるが、実は全世界の様々の要素の一断片にすぎず、天台本覚思想を反映した、諸法実相、無相真如こそ、まさに「芭蕉」の主題なのである。禅竹或は、禅竹時代こそ能芸術の絶頂期であって、以後、信光・長俊等によって新しい演出と技法が開拓されるが、作品に人間性の欠如が目立つ。世阿弥・禅竹の能と、それ等新しい能が併演されているのを見ても、明らかに古典期は禅竹で終っているのである。

（宮内庁書陵部図書調査官）